コーネル大学　林慶教授　インタビュー

インタビューワー：理事　吉田尚子　　コメンテーター：会長　川田睦

吉田：皆様こんにちは、理事の吉田でございます。

世界中の社会、そして生活に大きな変化を余儀なくされ、多くの命を脅かし続ける新型コロナウイルスの影響の一つとして、私たちJAHA日本動物病院協会でも様々な活動が制限されています。そんな中オンラインでこのような大変貴重な素晴らしいインタビューの機会をいただきました。今日は弊会川田会長と一緒に素晴らしい先生にインタビューをさせていただきます。

外科に精通している先生でなくても、この先生のお名前を知らない人は少ないと思います。改めてコーネル大学林慶教授をご紹介させていただきます。

おはようございます。

林：おはようございます。

吉田：それでは先生の大変輝かしいキャリアを私から簡単にご紹介させていただきます。

こちらは今回ウエブサイトでも皆様と共有していきますし、ニュースレターでもご覧いただくことができますので、簡単にご紹介していきたいと思います。

林慶先生は東京大学　獣医外科学研究室をご卒業、現JAHA理事の西村亮平教授の指導も受けられたそうです。

ウィスコンシン大学で博士号、さらに米国獣医師免許を取得し、アメリカ獣医外科専門医でいらっしゃいます。

ミシガン州立大学、カリフォルニア大学などを経て、2020年、今年にアメリカの超名門アイビーリーグのコーネル大学の教授になられました。コーネル大学はすべての分野でノーベル賞受賞者を輩出し、医学、獣医学でも全米屈指の名門です。

林教授、改めてお祝いを申し上げます。本当におめでとうございます。

略歴

1993年　東京大学農学部　獣医学科　獣医外科学研究室卒業（竹内　啓教授、指導教官：西村亮平先生）
1997年　東京大学　大学院農学生命科学研究科　獣医学専攻　博士（指導教官：佐々木伸雄教授）
1997年　ウィスコンシン大学　PhD
1997年　米国獣医師免許
2003年　ウィスコンシン大学　小動物外科レジデント修了
2003年　ミシガン州立大学　助教授
2004年　アメリカ獣医外科専門医(ACVS)
2010年　日本小動物外科専門医（JCVS）
2012年　カリフォルニア大学　准教授
2015年　コーネル大学　准教授
2017年　大阪府立大学　非常勤講師
2020年　コーネル大学教授
2020年　東京大学客員教授（辻本教授、西村教授・病院長、望月教授、大野准教授、桃井教授）

●インタビュー目的について

吉田：今回林教授からのお声掛けをいただき、このインタビューが実現できましたが、JAHAを選んでくださった理由とこのインタビューの目的について、ぜひお聞かせください。

林：吉田先生、始めまして。本当にどうもありがとうございます。また、川田先生のような偉い先生にご参加いただいて非常に光栄です。よろしくお願いいたします。

まず、初めに情報開示の必要がありますよね。

私は政治的には中立で、特定の宗教団体や営利団体と開示すべき情報はございません。

ただし、私は日本に行って大阪を訪れる際には、ここにいらっしゃる川田先生と是枝先生にたくさんごちそうになっていますので、そこにはひどい癒着が存在します。

今回はこのような素晴らしい機会をいただきまして、ありがとうございます。

目的としてはJAHAという非常に公共性の高い、影響力の高い組織を通して、わたくしの方から具体的なサポートをお願いするというのが、メインの目的です。

なるべく率直で直接的なお話にさせていただきたいと思いますので、どうか誰かに忖度することなくいい記事にしてください。お願いします。

吉田：本企画、JAHAとしてご一緒させていただいてありがとうございます。お話を伺うのがますます楽しみになってまいりました。

●渡米、ご専門について

吉田：さて、これほど輝かしいいキャリアをお持ちの林教授ですが、そもそもいつごろからアメリカを意識され、どのように今のご専門に進まれたのでしょうか。

林：素晴らしいキャリアと今おっしゃいましたけれども、そんなに輝かしいものではなくて、本当に地味な努力を続けてきただけなんです。

私は今ご紹介いただいた略歴に詐称はないと思います。

私は東京大学を 7 年かけて最低の成績で卒業しましたので、カイロ大学首席卒業の方とは偉い違いですね。

すごい経歴と言われましたけれども、私自身は向上心をもって、あとは動物が好きだということだけでやってきただけで、そんなに大したことないです。

もし、今日のお話で自慢話になったり傲慢な態度をとったら、吉田先生叱ってください。

それから問題発言があったら、川田先生イエローカードをだしてください。

今地味な努力を続けてきただけだということを言いましたが、今ご紹介いただいたように 1993 年に大学を卒業して、ずっと北米のアメリカで外科の勉強をしてきました。10 年後、2003 年に専門医の資格をとって以来 3 つの大学で教員として、小動物の外科の教育、臨床、そして研究に貢献するための努力をしてきました。

私は周りの人に影響を受けて、今まで素晴らしい指導者に恵まれてきたというだけで、コーネル大学の教授と言われると、めっそうもないという感じです。

私には 2 つ上の兄がいるのですが、今は普通の人ですが、小学校のときに学力テストで日本一になったりしていましたが、私は寝てばかりで何もできない子どもだと言われて育ちました。

これも自慢話ですけれども、高校と大学の直の先輩が一人ずつ宇宙飛行士になりました。古川さんと野口さんです。すごいですよね。そういう人に囲まれていました。

大学では 1 年のときは医学部と無理やり一緒にされ、医学部の人たちは勉強ができるというレベルではなく頭の良さがすごいんです。例えば元新潟県知事の米山は同級生です。彼は本当に正直で親切で素晴らしい天才でした。

そんな人たちにずっと囲まれて生きてきて、謙虚に努力を続けるということだけだったんです。

一つ言えることは、私は幼稚園の入園式から高校の卒業まで 1 回も学校を休んだことはないということです。

吉田：すごいですね

林：それ以外は地味に努力をしてきただけです。

また吉田先生が華麗なるとおっしゃいましたが、留学というのは本当に大変でした。

特にお金がなかったです。月末になると食費を削っても光熱費が払えず暖房が入れられないという経験を何度もしましたので、華麗ということはないです。

川田先生もよく知っていると思いますけれども、南カリフォルニア大学で政治学を勉強してきましたと言って問題になった人が二人ほどいましたけれども、そんなに華麗な経験は私にはないです。川田先生には実際に見ていただいているので、よくわかると思います。

過去の話はこのくらいで、日本獣医師会の会報誌にこれまでの経歴がまとめてありますので、興味のある方はそちらをご覧ください。（日獣会誌 2010 年 No.63　P251～258）

吉田：地道な努力を積み重ねて今の地位にいらっしゃるということですね。ありがとうございます。

東京大学を卒業されてアメリカに行かれ、それ以来小動物外科一筋ということですね。

●JAHA での林教授のご貢献について

吉田：様々な形で小動物外科に貢献されているということですが、今日は川田会長も同席していますので、ここで日本動物病院協会への林先生のご貢献を中心に川田会長よりご紹介させていただきます。

川田会長よろしくお願いいたします。

川田：林先生、こんにちは。半年ぶりぐらいですかね。横浜でありました日本の内科学会のときお会いして以来になりますか。

林先生、今回コーネル大学の教授になられましたこと、友人として大変うれしくおめでとうと思います。本当は直接言いたかったのですが、コロナでこういった形になりました。

林先生と一番最初にお会いしたのは、林先生がミシガン州立大学にいらっしゃったときですかね。2003 年か 2004 年の外科学会、あのときもう専門医になられていましたよね。

林：過去の記憶はあやふやですね。

川田：ワシントン DC の人工関節ミーティングか何かが最初でしたかね。

林：あれはまだウィスコンシン大学のレジデントでした

川田：ではもっと前ですかね。2002 年とか。それからもう 20 年近くになりますね。

相変わらず若いですよね。まあ若い時はもっと若かったですけど、50 過ぎても相変わらず男前だと思います。

林先生と JAHA との関りというのは、覚えていらっしゃると思いますが、JAHA には認定医制度というのがありまして、そのなかの認定医認定委員というものを 2010 年 7 月から 2016 年 6 月までしていただいておりました。

私自身が JAHA の学術委員をしておりましたので、その後何度か東京や大阪にきていただいて講演会をしていただいています。10 年前の WJVF の第 1 回大会の講師もお願いしています。その後 JAHA の年次大会にも呼ばせていただき、骨折の治療の講演をしていただきました。それが 2016 年、5 年前ですね。東京大学の弥生講堂で講演していただいたのを覚えております。

そういった形で、JAHA との関りも認定医の委員や国際セミナーの講師としてきていただきました。

個人的には、林先生に近くにいていただいたおかげで、私や私周辺の友人たちの技術や知識が急速に高まりました。林先生がいなかったら、私自身は様々な整形外科的な手術や治療に関してもっとあやふやで正確でない、経験にしか基づかない治療をしていたんだろうなという風に思います。

ですから、米国で苦労されて努力されてステップアップしていかれて、その中で多くの情報を私たち日本の獣医師に与えてくださった、それがもっとも林先生が日本の獣医療に対してしてくださった大きいことじゃないかと思います。

吉田：どうもありがとうございます。

教育と研究でご多忙の中、日本の獣医学のことも忘れることなく、リードし続けてくれる林教授とうことですね。

資料1

●ご活躍の紹介

吉田：引き続き、共有していただいた資料を中心にご活躍をご紹介したいと思います。

資料 1 をご紹介いただいてもいいですか。

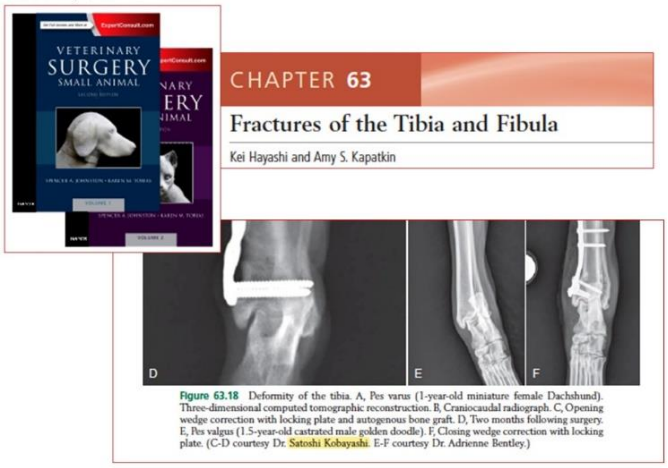
林：資料 1 は昨年出版された第 5 版になりますけれども、学生や一般獣医師向けに書かれたいわゆる小動物外科の教科書ですね。フォッサム先生がエディターで、世界で一番売れている小動物外科の教科書ですが、それの整形外科の部分の編集を頼まれまして、フォッサム先生とは働いたことはないんですけれども、おそらく人づての評判を聞かれて頼まれました。これはえらいことですね。とても大変でした。ただしやりがいのある仕事で、後で詳しくお話しすると思いますけれども、実際の現場や授業で教えることの限界を感じていましたので、教科書は世界中で読まれる可能性があるというので、影響力が非常に大きいと思います。これが昨年達成したことの一つです。

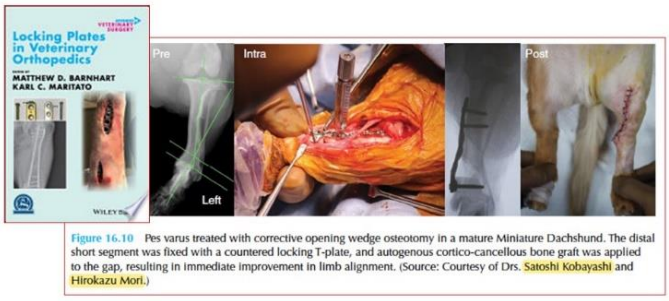
それから右の小さい画像ですが、日本でも貢献したいと思いまして、専門医がバイブルと呼んで常に使っている日本語訳のお手伝いをさせていただきました。最初の AO 法というのは泉澤先生の編集で、私が翻訳のお手伝いを少しだけしています。オレンジ色のカバーの方は、私が 3 年ほど働いていたミシガン州立大学の先生方が書かれた本ですが、原先生の編集で日本語にするのをお手伝いしました。

資料 1 のその 2 ですが、この外科の専門書が昨年出版されましたが、私の担当している章に、小林先生と森先生の功績も載っています。

その 3 の本は完全に宣伝になってしまいますけれども、これは日本でも実際の臨床に役に立つような本を

資料1（その2）





ということで、跛行診断、専門医でなくても外科に興味のない人でも、毎日頭を悩ませる跛行診断について、主に図で示した教科書を、東京大学の本阿彌先生と一緒に、日本語で出版できたこと、これは非常にうれしかったです。これは実際に役に立っているかと思います。

吉田：ありがとうございます。

一つ目のアメリカの教科書の表のところに日本人の名前があるということは、本当に誇らしいと思います。またこういった跛行診断につきましては、私たちジェネラリストにとってもありがたいな、という身近に感じる内容で、日本の獣医さんたちを助けようとしているというお気持ちが表れているなと思っています。

本当にありがとうございます。

吉田：アメリカのご功績についてさらに伺っていきたいと思います。

資料２は先生のお名前が１位、２位と受賞歴に書かれているとお見受けしますが、どのような賞になりますでしょうか。

林：これは、私自身が受賞した訳ではないのです。私が指導者として教えた研修医たちが受賞したもので、これは川田先生もよくご存じだと思いますけれども、ACVS というのはアメリカとカナダ、北米の専門医を統括する団体で、我々の活動の中心となる学会です。ここで毎年、その年に優れた業績を残した研修医とその指導者を表彰する制度があるんです。先ほど、教授就任おめでとうございますと言っていただきましたが、それよりうれしいのは教育者として自分の同業者から厳正な審査をもとにこういった賞を得られたということが、非常にうれしいです。一つ目は 2010 年は論文、2018 年は臨床に関する部分で指導者として認められたということが非常にうれしいです。

その際その場に木俣先生がいらして、最初に“おめでとう、すごいね！”とおっしゃってくださって、その価値を理解してくれたのが木俣先生でした。

これは専門医が投票して選んだ、ということでそれはそれで素晴らしいんですけれども、次の資料３これは一番うれしくて、同じ ACVS の団体で私の元の教え子たち、研修医だった教え子たち、今や専門医になっていますが、自分の指導してくれた人をオナードメンターシステムとして、指導者として殿堂入りとして認めてくれた、元の教え子たちがこういった運動をしてくれたというところで、これは一番うれしいですね。教授になったとかコーネル大学にいるとかよりも、元の教え子たち、毎日毎日一緒に手術をして、毎日毎日合併症に悩みながら暮らしたっ弟子たちがこういった運動を起こしてくれた。

基本的にはオナードメンターシステムというのは引退した人に渡すものです。あるいは弟子たちに引退しろと勧告されているのかもしれませんが、そういった賞をいただきまして、これが一番うれしいことです。

吉田：なるほど。メンターというのは、先生というより少し身近な指導者とか恩師の方というイメージがあるのですが、そういう感じですかね。

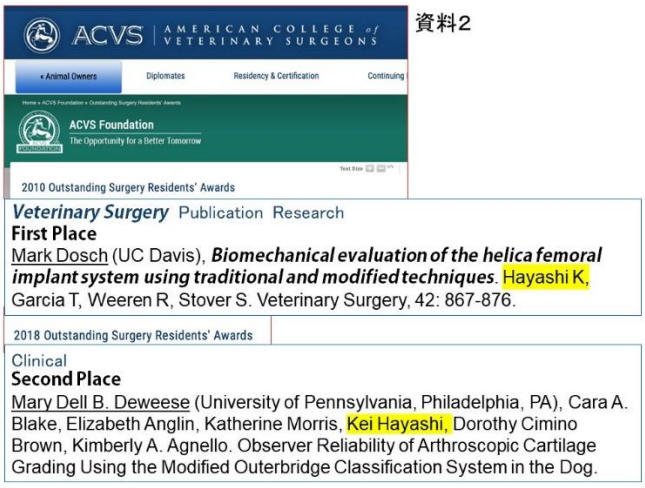
林：そうですね。恩師ということですかね。

吉田：上の方の評価が上にあがるためには大事なのかなと思うのですが、指導を受ける方の学生さんたちとか先生が教えていらっしゃる方がこの先生は素晴らしいという評価をしたという賞になるということですね。

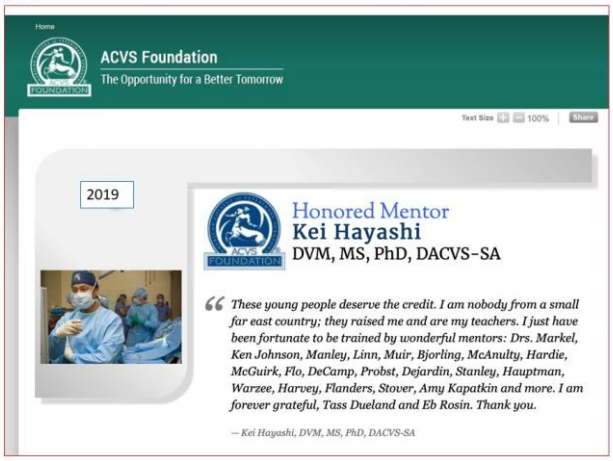
林：そうですね。これが一番うれしかったです。これをいただいたので、もういつ引退してもいいと決まりました。

資料１（その３）

資料２



資料３



吉田：この小さな文字で書かれているのは先生のコメントですか（資料 3）？簡単に教えていただいてもいいですか。
林：そうですね。これは私がお世話になった先生の名前を羅列しただけです。
あとはメンターと言われますけれども、弟子たちに教わることの方が多かった、と感謝しています。
吉田：すごく謙遜されているような感じですけど、アカデミー賞の授賞式のコメントのようでとてもすてきだなと思いました。
林：たかが獣医の外科医なので、そんな大したもんじゃないです。
吉田：いえいえ、外科の先生はどこでもあこがれということがありますので、一番教授に合っているなと。
林：先生は周りに傲慢で威張っている外科医しかご存じないのでしょう、そうならないように気を付けているだけです。
吉田：本当に温かいお人柄を感じているんですけれども
林：とんでもないです、そんなふうに言われる人間じゃないのは川田先生がよく知っているので、やめてください。

●COVID の影響も含め、現在のコーネル大での研究環境について

吉田：本当に数々の困難があったということで、先ほどからお話をされていて、努力を積み重ねられての受賞であると思うのですが、COVID の影響も含めて、現在のコーネル大学での研究環境というのはいかがでしょうか。
林：COVID の影響は非常に大きいですけれども、ニューヨーク州というのは管理が徹底していまして、我々は非常に平和に暮らすことができています。COVID が起こるまでは、1 年間に 500～600 例の症例をこなしてきました。ほぼ毎日整形外科の手術を指導していましたが、どんなにがんばってもこれ以上の数はこなせない、実際に予約を取りたくてもいっぱいいっぱいで入れないという犬や猫が実はいるんです。
これは様々な問題がありますけれども、限界を感じていた。自分が実際に助けられる犬や猫の数は限られている。また教育の面でも学生にはどんなに頑張っても 1 年間で 100 人ぐらいに限られたことしか教えられないということで、このように非常に恵まれた環境で働いていたとしても、まだまだ病気やケガで苦しんでいる動物は助けられないと限界を感じています。
COVID のおかげで一つわかったことがあります。一つ真理に気づきました。極論と言ってしまえば極論ですが、周りの人を見ていると犬や猫を飼っている人は精神的に影響を受けていないのです。今回のお話にも深く関係が出てくると思いますけれども、少なくとも私の周りあるいはニューヨーク州では、家に犬や猫がいて、隔離になっていても全然困らないよ、お金は足りないけれども幸せだよという話をよく聞きますので、一つの真理は、人間の幸せは健康な動物だということです。私の極論です。真理と言っても間違いないと思いますけれども、私自身隔離生活を続けていますけれども、自分の愛犬さえいればいいと、本心から感じたことです。
ということで COVID のせいあるいはおかげで気づいたことは、特に動物を飼っている人にとっては幸せは健康な動物であると強く感じました。どうでしょうか。
吉田：そうですね。
私も人と動物の関係ということについて、本当に健康な幸せな動物と暮らすということが人の心理を支えるということを体感している一人ですので、今の先生のご意見を聞いて、大変心強く思っております。
JAHA もこういったことを趣旨として、動物病院協会として、動物病院の発展に貢献していこうという団体ですので、今の先生のご意見というのは、JAHA と共感されているなということを感じました。ありがとうございます。

●限られた状況でのアプローチについて

吉田：先生が先ほどのお話の中で、限られた形でしか臨床であったり教育であったり、アプローチできないかなというお話があったんですけれども、こういった状況においてアプローチする上で、さらに考えていらっしゃることはありますか？
林：先ほども申し上げましたように、実際の教育の現場で行えること、もちろん大事ですけれども、限界があります。あと幸いなことに、日本で貢献できるように、いろいろな講演や講習会を頼まれることが多いです。すばらしい機会ですから、できるだけお受けするようにしています。
JAHA にもだいぶお世話になりましたし、もう一つ感謝したいのは、だいぶ多く私の友人たちが JAHA でお世話になって、みんなすごい喜んでいます。ありがとうございます。かなりの数の私の友人が日本に行きました。
そういった形でできる限りのことはしていますが、時間的あるいは地理的に限度がありますし、講演会という機会は短期的なことですから、本当に大事な基礎の部分まで語る時間がなかったり、あるいは趣旨が伝わらなかったり、私の技量不足なんですけど、本当の趣旨が伝わらなかったりといった問題もあります。
日本に帰れるという機会があれば、なるべくお受けしていたんですけれども、そういった悩みもあった。その時に、毎年お話しさせていただいている横浜の永岡先生という偉大な先生がいらっしゃるんですけれども、先生に怒られたんです

ね。林先生の本当の仕事はオリジナルの論文を書くことだと。それで目からうろこが落ちたということではないですが、おっしゃる通りだなと。

JAHA で来日したときも同じことを言われたんですけれども、そのときはカリフォルニア大学で同じような仕事をしていたんですが、現在のコーネル大学から仕事のオファーを受けていた。

そのときに影響を受けたのも、同じ永岡先生が、コーネル大学というのは昔からいい論文を書いている大学だと。永岡先生ご本人も、昔書かれた英語論文があって、まず最初にその資料をくれと連絡してきたのは、コーネル大学の伝説的なデラハンタという教授なんです。

カリフォルニア大学よりもコーネル大学に行ってしっかりとオリジナルの論文を書いた方がいい、それが林先生の仕事だよ、という風に教えを受けたので、これからお話しするような仕事のシフトがあったということです。

吉田：永岡先生の名言がタイミングよく心に響いたという感じですかね

林：その通りです。

●研究教育活動において印象に残ったエピソード

吉田：先生の研究教育活動において、さらに印象に残ったエピソードはありますか

林：それも同じころ、コーネル大学に移る決意をしたころ、2013 年ごろ、偶然ご近所の横浜の藤井先生が日本で何かの学会賞を受賞した論文を拝見いたしまして（資料 4）、これは非常に革新的な内容であると思いましたので、英語論文にしましょうと、一緒にお仕事をさせていただきました。本当に同じ区内のご近所です。昔から藤井先生の病院は見て育ったんですけれども

吉田：先生のご実家ということですか

林：そうです。

これを頑張って英語論文にしたところ、アメリカはもとよりヨーロッパでも世界中の先生から、これは面白いとすごい反響がありました。予想以上の反響でした。

この 2013 年の藤井先生の論文のおかげで、なるほど獣医学の貢献というのは永岡先生がおっしゃったように英語論文の影響力の高さを改めて認識したという事件がありました。

その後日本の学会に参加して、主に獣医麻酔外科学会という学会ですけれども、すばらしいと思われる発表を聞く度に、私の方からアプローチして、これを英語論文にしましょうという活動を、実は最近一生懸命続けているんです。

私がお手伝いすることなく出版されている素晴らしい論文もありますが、日本の叡智が埋もれているという印象を受けました。

資料4

Medial Ridge Elevation Wedge Trochleoplasty for Medial Patellar Luxation: A Clinical Study in 5 Dogs

Koichi Fujii[1], DVM, Toshifumi Watanabe[2], DVM, PhD, Takayuki Kobayashi[3,4], DVM, PhD, and Kei Hayashi[5], DVM, PhD, Diplomate ACVS

[1] Fujii Animal Care Center, Yokohama, Japan, [2] Azabu University, Kanagawa, Japan, [3] Graduate School, Kanazawa University, Kanazawa, Japan, [4] Animal Clinic Kobayashi, Saitama, Japan and [5] School of Veterinary Medicine, University of California-Davis, Davis, California

Evaluation of bone deformities of the femur, tibia, and patella in Toy Poodles with medial patellar luxation using computed tomography

Shinji Yasukawa[1]; Kazuya Edamura[1]; Koji Tanegashima[1]; Mamiko Seki[1]; Kenji Teshima[1]; Kazushi Asano[1]; Tomohiro Nakayama[2]; Kei Hayashi[3]

[1]Laboratory of Veterinary Surgery, Department of Veterinary Medicine, College of Bioresource and Sciences, Nihon University, Fujisawa, Kanagawa, Japan; [2]Laboratory of Veterinary Radiology, Department of Veterinary Medicine, College of Bioresource and Sciences, Nihon University, Fujisawa, Kanagawa, Japan; [3]Department of Clinical Sciences, College of Veterinary Medicine, Cornell University, Ithaca, NY, USA

Force Plate Gait Analysis and Clinical Results after Tibial Plateau Levelling Osteotomy for Cranial Cruciate Ligament Rupture in Small Breed Dogs

Hirokazu Amimoto[1,2] Tetsuaki Koreeda[1] Yoshiyuki Ochi[1] Ryota Kimura[1] Hideo Akiyoshi[3] Hidetaka Nishida[3] Takayoshi Miyabayashi[4] Brian S. Beale[5] Kei Hayashi[6] Naomi Wada[2]

Clinical Efficacy of Bone Reconstruction Surgery with Frozen Cortical Bone Allografts for Nonunion of Radial and Ulnar Fractures in Toy Breed Dogs

Shuntaro Munakata[1] Yukari Nagahiro[1] Daichi Katori[1] Norihiro Muroi[1] Hiroyuki Akagi[1] Nobuo Kanno[1] Yasuji Harada[1] Shinya Yamaguchi[1] Kei Hayashi[2] Yasushi Hara[1]

Functional Anatomy of the Craniomedial and Caudolateral Bundles of the Cranial Cruciate Ligament in Beagle Dogs

Koji Tanegashima[1] Kazuya Edamura[1] Yuki Akita[1] Atsushi Yamazaki[1] Shinji Yasukawa[1] Mamiko Seki[1] Kazushi Asano[1] Tomohiro Nakayama[2] Taro Katsura[3] Kei Hayashi[4]

この資料 4 をご覧ください。特に面白いのは、川田先生も覚えていると思いますが、2 番目の安川慎二先生の研究です。安川先生、今横浜で働いていると思いますが、麻酔外科学会で発表したときに、結構いじめられてたんですね。具体的な話を言うと、CT を撮ったらレントゲンよりいいのは当たり前だろといじめられていたんですが、私はそうは思わなかったんですね。安川先生のグループに、これは英語論文にした方がいいよ、一緒に頑張りましょう、と英語論文にしたところ、今やほぼすべての同じ内容の学会発表のときには必ず引用されます。特に具体的な名前を出すと、ミズーリ大学のデレック・フォックス教授が矯正骨切術に関する研究では世界的な権威なんですね。フォックス先生が講演するときには必ず冒頭に安川と論文の引用、引用どころか背景の一つとして世界的な常識になっていて、非常に影響力が高いということがあります。これは数年前でですけれども非常に大きな日本の獣医学の功績だと思います。

吉田：これは林先生がお声掛けをしなかったら英語論文にならず、フォックス教授もその内容を知るということにはならなかったんですね。

林：そんなことはないです。これは素晴らしい研究ですので、私は本当にお手伝いしたというだけです。

この左側の Veterinary Surgery と VCOT というのが我々の主な発表の場ですが、それ以外にはちょっと字が小さくて見にくいですが、下の方の埼玉の宗像先生、JAHA の関係者ですよね、JAHA 関係者だから載せているわけではないですけれども、これも世界初の発表ですね。それから千葉の種子島先生の研究も英語論文になって、非常に多くの人から、これ面白いねというフィードバックを受けています。

それから最も臨床的に影響があったのは真ん中の網本先生のペーパーですね。以前は大阪に勤務されていたんですが今はどちらですかね。

川田：今は山口ですね。山口のお父様の病院です。

林：この真ん中の網本先生の論文というのは、今アメリカ、ヨーロッパで一番数多く行われている手術法、大型犬では確立されている手術法が小型犬でも同様な臨床成績がありますよというのを科学的なデータで示した素晴らしい論文ですね。言ってしまえば、これは明日からの臨床のオプションを変えてしまったと、非常に影響力の大きいペーパーで、このペーパーのお手伝いをさせていただいたことは、非常にラッキーだったなと。網本先生のペーパーは素晴らしいですね。

吉田：藤井康一先生も JAHA の理事をしてくださっていますし、宗像先生もホスピタルの委員会で非常に貢献をしてくださっているんです。

林：偶然と言ってはなんですが、藤井先生以外は大学院の博士論文に関係しているんですね。日本は研修医や専門医の制度はまだできていませんけれども、大学院の制度は確立しているので、たとえ社会人大学院生であったとしても、こういう形で研究をまとめられているのが非常に面白いなと思いました。

川田：安川先生の発表は覚えています。発表が終わった後に林先生と 3 人で大宮のソニックの裏の焼き肉屋で、焼き肉を食べながら彼がラップトップを開いて林先生に一生懸命説明してたのを覚えています。

林：このような形で大学院に関連する研究が多いですけれども日本にはまだ埋もれている叡智があるなと思います。

最近は心臓学の上地先生や軟部外科の方でも日本の論文で優れたものが出ていますので、非常にいい傾向にあると思いますが、まだまだ埋もれているものがあるので、私がなんらかのお手伝いができれば、どんどんお手伝いしていきたいと思います。

このような形で英語論文あるいは科学論文というのは、世界共通の言語あるいは通貨という形で機能しますし、審査を受けることによって達成された科学論文というのは何よりも本当に強いエビデンスになりますので、臨床成果を発表するには一番いい形だと思います。

それから発表者にとっては英語の科学論文というのは一生の財産となりますので、非常に有用だと思います。安川とか網本という名前は、世界中の人が知っています。

吉田：英語論文で世界中の人にアプローチができるということですよね。

林：しかも大事なのは、これらのペーパーはすべて、実際に苦しんでいる犬や猫を改善するためのペーパーですから、我々日本人がよくやる研究のための研究とはちょっと毛色が違うんですね。これは非常に素晴らしい傾向だと思います。

川田先生も社会人大学院生ですよね。

川田：そうです。2 回目の社会人大学院生です。

ずいぶん前に府立大学で社会人大学院生を挫折しまして、現在は山口大学で進んでおります。

林：川田先生は他の分野で素晴らしい貢献をなされています。

偶然ではないのですが、安川、網本、宗像、種子島は全員社会人大学院生です。これも一つの形かなと思います。

吉田：日本人の先生方がこうやって大学院生として、世界に向けたご活躍を林教授とタッグを組んで実現してきたという例を見せていただいてきたんですけれども、川田先生今までのお話で何かコメントはありますか？

川田：私は臨床畑というか動物病院でずっと働いてきました。その中で林先生らのお話を聞く中で、研究を背景にしていないと知識が浅いということを知りました。よい臨床家と思われる人は、よい研究をしている、あるいは研究に対して熱心であるというのは共通しているのではないかと思っております。

札幌であった麻酔外科学会の帰りに、林先生と一緒に札幌から大阪まで飛行機に乗ったんですけど、その時に、林先生はどういう将来像を持っているの？どういうことを望んでいるの？と聞いたところ、死ぬまでに 10 本、人のためになる人の記憶に残る論文を書きたいと言ったのを非常に強烈に覚えていますね。

このインタビューの前に話したんですが、社会人の大学院生は臨床もしながらやりますので、また研究に慣れていないので、どうしてもドロップアウトしやすいんですね。私自身もそうですけれども。ですので林先生の今のお話を伺って勇気づけられました。

より多くの日本の臨床獣医師の先生もドクターを真剣に考えて取って行かれたらいいなと、特に私より若い獣医師には強くそのようなお話をさせていただくことが多いです。

林：社会人大学生という話がありましたけれども、やはり我々は資本主義の中で生きているのですから、お金の問題はどうしても避けて通れないですね。本日の主題につながっていく部分ですけれども、社会人ですとお金に余裕があるのでできるということもありますよね。

資料 4 の網本先生は、当時働いていた病院の是枝先生という院長が非常にジェネラスで金銭的なサポートを謙虚にされています。宗像、種子島は二人とも院長ですから、あまりお金の心配はなかったのかなといったような現実的な問題をこれからお話しさせていただきたいと思います。

●研究活動について

吉田：それでは研究活動について詳しく伺ってもよろしいでしょうか。

林：今まで申し上げましたように、私たちは獣医師ですから、苦しんでいる犬や猫の治療に役に立つ研究をしたい。ただし現実として、今お金の話をしましたけれども、犬や猫に臨床的に意義のある研究というものには現実的に予算がつきません。これは日本でもアメリカでも一緒です。予算がつかないと、社会人大学院生のような特殊な状況を除いて、なかなか研究や論文発表が難しくなります。つまり犬や猫の病気を理解して最適な治療法を考えるためには、実は予算の欠如というのが現実的な最大の懸念である、あるは障害であると考えています。

吉田：それは本当に大きな問題だと思います。

林：川田先生今から問題発言をしますけれども、犬や猫の研究をするためには政府系の予算は全く期待できません。現在アメリカも日本も反知性主義ですから、教育だとか科学だとか環境問題に対する認識が非常に低い、あるいは理解する能力が欠如しているのが現実です。さらに犬や猫の病気の基本的な部分を理解するという意味では、研究は企業の利益主義とは合い入れるものではありません。薬とか器具を売るという研究ではなく、病気を理解するという研究は企業から予算を得ることも不可能です。ということで現実は厳しいです。これはおそらく一番崇高で意味のある研究活動であるけれども、実際にはお金がないのが現実です。

それを解決するあるいは打破するためにはどうしたらいいかというと、犬と猫あるいは動物一般を愛する志の高い人から寄付を募ることだと思います。これはなんでこう考えるにいたったかというと、アメリカの政治家で元ハーバード大学の教授だったエリザベス・ウォーレンという人がいるのですが、その人の政策の一つで、金持ちから税金を取りたい、ただ金持ちが税金を払いたくないのであれば、これまでがんばってお金を稼いできたことはすばらしいということを認めるために、慈善事業などに寄付をしなさい、ということを認めるような社会を作りましょうという政策を言われています。資本主義の世界で生きていくという現実ですから、犬や猫の研究をしたいときには、それが一番現実的な方法かなというふうに考えています。

資料5

吉田：そのような形で成功したケースはありますか。

林：資料 5 をご覧いただきたいのですが、素晴らしい具体的な美しいお話になってしまいますけれども、今年の 2 月に VOS という世界的な獣医の整形外科の学会があったのですが、この写真にありますのは私どもの学生ですが、日本の先生方、具体的に言うと名古屋の陰山先生、先ほどから何度もお話に出ている大阪の是枝先生、そして北海道の賀川先生と共同研究をいたしまして、日本で非常に多い病気の基礎的な病理学と診断学に集中した研究を発表したんです。この研究をするに当たって、この資料にありますように、動物人工関節センターとノースラボから共同研究資金としてお金を送金してもらって、初めて世界的な国際学会での研究発表が可能になったんです。学生にとっては素晴らしい体験になりますが、予算の面でもこういった共同研究資金を得ることによって可能になったという実際的な具体例ですね。

会場はアメリカだったので大げさだったのかもしれませんが、まさにスタンディングオベーション、大喝采を受けました。いろんな意味で美しいと、企業から献金を受けていない、また少額ではありますけれども研究資金を得て、学生が実際に役立つ臨床研究をしてそれを学会発表したというような実例になります。こういったようなことを理想的には続けていきたいと思います。これが発表されたことによって非常に大きな反響もありましたし、実際に明日からの臨床に役に立つ内容であることが大事だと思います。帯広畜産大学の生物統計学のチームにも参加してもらっていますので、非常に幅が広いです。

吉田：素晴らしいコラボレーションですね。

ここにお名前がでてきている賀川先生も JAHA の理事です。

今回林先生にインタビューすることをお話ししたらメッセージをいただいたんです。
林先生、教授のご就任おめでとうございます。今度みんなでお祝いしましょうね、と賀川先生がおっしゃっていました。
素晴らしい例をお話しいただいてありがとうございます。

●JAHA 会員、サポーターへのメッセージ

吉田：ずっとお話を伺いたいところなんですけれども、時間もありますので、林教授から JAHA の会員そして会のサポーターの皆様にメッセージをお願いしてもよろしいでしょうか。

林：今の具体的な例でお話ししましたように、私の専門は犬や猫ですけれども、犬や猫の病気を理解して、より良い治療法を開発するためには、正しい研究が必要です。そのためにはどうしても予算が必要です。一つの研究発表をするのに、諸経費を含めてだいたい 5000 ドル、50 万円かかります。一つの目安としてそれぐらいないと、こういった発表はできないというのが現実です。お金の無心をするのに卑屈になる必要はないと私は思いますけれども、そういった形で志の高い経済的に余裕のある、そして我々の趣旨に賛同してくださる方がいれば寄付をお願いしたいというのが、本日の主な目的です。

目的がぶれないようにするのは大事ですが、もう一つお願いがあるのが、それ以外にも我々が行っている活動の一つで、学生の教育という大義名分を持ちながら、シェルターやレスキューグループで足を怪我した犬や猫を救うプログラムがあります。安い値段や無料で手術を学生と一緒にしてあげるというプログラムがあります。アメリカでは現在経済の状態が非常に悪いので、資金が底をついてしまった。研究発表の方は約 5000 ドルと申しましたけれども、シェルターあるいはレスキューの動物の手術をするのは、もうちょっとお金がかかるので、20,000 ドルです。学生のプログラムなどを含めて 200 万円ぐらいかかります。寄付がなくなってしまったというのが現実なのです。これは去年スバルという車の会社が、アメリカで非常に好調で、慈善事業にたくさん寄付をしているので、コーネル大学にも寄付をしていただくお願いをしていたのですが、コロナの話で頓挫してしまいました。これも同じような形で有志の方や知り合いの方がいらっしゃいましたら、ぜひ連絡をしていただきたい。私の個人秘書の JAHA 川田まで連絡をしてください。

こういったような様々な活動は、いやらしい話ですけれどもお金が必要になってしまいます。お金の無心をするわけではないですが、これが現実です。ただその趣旨を理解していただきたいと思います。

たまたま知り合いがいる神奈川新聞、日経新聞、朝日新聞にもこういった活動の広報をしてくれと頼んだんですが、この状況ではなかなか前に進んでいないようですので、その方面、例えば活字媒体で何かコネクションがある、あるいは趣旨に賛同してくださるような方があったら、こちらも宣伝を広げていきたいと思いますので、せっかく JAHA のニュースレターという素晴らしい機会を得られたことをきっかけにどんどん広げていきたいと思います。こちらの方も JAHA 川田まで連絡してください。

吉田：一番大事なことは共同研究へのご支援、それからもう一つはシェルターやレスキューのワンちゃん猫ちゃん学生さんたちがお手伝いをして、動物を助けられて教育にも役立つウィンウィンのプログラムのために、まとまったお金が必要になってくるということですね。最前線の教育機関の大学がこういった動物福祉活動にもご尽力されているのは、未来の優秀な獣医師さんたちがそういう倫理感の元で育っていくのは本当にすばらしいと思います。
ぜひ法人賛助会員の企業の皆様にもよろしくお願いします、と申し上げておきます。

●林先生の日本での活動について

吉田：今後は林先生お忙しくなられると思うのですが、日本でも活躍していただけるのかな、と心配されている方も多いのではないかと思いますが、具体的にその辺りはいかがでしょうか。

林：今までアメリカで働いてきたのは、私の利己的な理由で、私自身がいいトレーニングを受けるためにアメリカにいたわけですけれども、日本人ですからできるだけ日本に還元したいと、学んだことを日本に伝えたいと思っています。活動の主体はコーネル大学になってしまいますけれども、今回教授に就任したと同時に、母校である東京大学でも客員教授という形で職を得ましたので、できれば年に数回日本にきて、様々な形で貢献したい。具体的には 4 つ目標があります。

あまり詳しくはお話はしませんが、まず一つはいろいろな大学の学生向けの授業で臨床医になるのはそんなにひどいことじゃないよという啓もう活動をしたいです。最近様々な大学で授業をする機会があるのですけれども、今の学生は臨床医なんてつらいことばっかりでいいことがないと言われて育っているんですね。その意識をまず変えたい。つらいのは間違いではないですけれども、そもそもなぜ獣医師になろうと思ったかを思い出してほしいということが一つですね。いくつかの大学で学生に授業をする機会が得られていますので、それは続けていきたいです。

二つ目は授業だけではなく、いわゆる実習を日本にいる研修医に向けて様々なお手伝いをしたい。現実的には東京大学に行くことになると思いますので、そこでの研修医に向けて実際に手を下して、今いらっしゃる望月先生、大野先生、桃井先生ら多くの先生と一緒に協力しながら実習のお手伝いをしたい。

三つめは、日本の獣医療に一番大切だと思われるものですね。一般臨床医に対して卒後教育の機会を広げてそれのお手伝いをしたいと思います。これもまた本日の趣旨とは異なりますけれども、アメリカと日本の獣医学教育の一番の違いは、臨床医学の基礎の基礎を教えているかいないかというところですね。日本の獣医師には非常に優れた技術を持っている人はいますけれども、広い意味で基礎の基礎の教育を受けていないのです。これは学校教育を変えるのはまず無理ですから、卒後教育という形です。今回のコロナの騒動で分かったことは、いわゆるオンラインの授業や会議はだいぶ可能ですよね。今日もこういった形でお話しできているように、こういった形で卒後教育で内科、外科にまたいで広く基礎的な臨床能力、あるいはもっと具体的に言うと診断の力を教育する制度をお手伝いをしたいということです。

最後になりますけれども、専門的な教育を受けたい人もいますから、日本における専門医の育成に関しても、獣医麻酔外科学会を中心にして、アジアに広げていくという形で協力をしたいと思います。

林：今アメリカやカナダでも今アジア出身の専門医がだいぶ頑張っています。私の愛弟子の韓国のキム先生もアメリカで随一の頭脳と呼ばれていますし、もう一人私の愛弟子の青木康至先生という日本人は今カナダで教員として大活躍していますので、アジアからもこれからどんどん発信していくべきだと思います。私の個人的な意見ですが、日本の獣医療というのは今までの様に欧米追従あるいは人間の医学部追従というのはいらないと思います。アジア独自あるいは日本独自のスタイルを確立してより基礎的な部分に重点を置きながら医療を改善していくのが必要だと思います。こういった活動は、20年来の友人である川田大先生のお力を借りるしかないので、そういった方面で頑張っていきたいと思っています。

吉田：林先生がアメリカ人の学生さんだけでなくて日本の獣医学にこれだけ心を寄せていただいているということは本当にうれしく思っております。

●川田会長のコメント

吉田：川田会長、今日いただいたお話について一言いただいてもよろしいですか。

川田：林先生ありがとうございました。

途中で述べましたが、本当に林先生がいらっしゃらなかったら日本の臨床獣医学教育というのはずいぶんとまだ未開の部分があったと思います。まだまだ我々は林先生から学ばなければいけないことが非常に多くあると思います。

また、家庭動物医療あるいは犬や猫の動物医療のことを小動物医療と言いますけれども、そういった小動物医療にかかわる我々開業獣医師もだんだんと洗練されてきて、JAHA 動物病院協会でやっております CAPP 活動、ヒューマン・アニマル・ボンドに関すること、それから吉田先生も熱心にされていますコートハウスドッグなどに関して熱心に取り組んでおります。

先ほど林先生もおっしゃられていましたが、ビジネスに関わらないことというのは、なかなかそれそのものがお金を生み出したりすることはできませんから、皆さんの共感していただける方の協力がどうしても必要になります。

この内容は一般の方々も見られると思いますけれども、動物病院関係者の方も多く見られると思います。

日本も 2 月以降コロナウイルスの感染症によって被害に遭われた方が多くいらっしゃいます。仕事の内容によっては仕事ができなくなったりあるいは会社や店舗を閉鎖したりされる方も多くいらっしゃいます。その中で私は、小動物、家庭動物医療の動物病院は、患者様に非常に多くきていただいていて、日本の動物病院というのはこのコロナウイルスの中でもまだ仕事としてちゃんとできている状態です。仕事に救われたというふうに本当に思っています。救われた内容をまた社会貢献であったり、あるいはより獣医学を進歩させることに協力していただければうれしいと心より思っております。

吉田：ありがとうございます。

長時間にわたって本当に興味深い、日本の動物病院の将来にも深くかかわるようなお話をいただきました。このような短い時間では本当に語りつくせないほど、林教授はすごく謙遜していましたけれども、今川田先生がおっしゃったような多大なる影響力というのがこれからも発揮していただけるように、皆様方のご支援をぜひよろしくお願いいたします。

●終わりに

吉田：最後に林先生ひとことありましたらお願いします。

林：吉田先生の方から何かありませんか。

吉田：先生も保護犬や保護猫の治療をされているということがありましたが、そういうことについて日本の状況も少しずつ変わってきているとは思いますが、その辺りはいかがですか。

林：JAHA の方にもう一つだけお願いしたいのは、犬や猫は買うものではなく、里親をしてみたり保護したり引き取るというオプションもありますよということを、今先生がおっしゃったように意識改革を JAHA の方から、すでにやられているとは思いますが、もっとどんどん日本人の意識改革をしていただきたいと切に願います。現実的にコーネルの私の周りの人間で犬や猫を買ったという人は一人もいないです。どうしても引き取り手がなかったり事情があってレスキューされている犬や猫がたくさんいますので、アメリカかぶれをしているわけではないですけれども、日本の現状にびっくりしているということがありますので、引き取るあるいは里親だけでもするというオプションを考えてもらえるようにということを JAHA も活動としてされていると理解していますので、そちらの活動もすばらしいと思います。

吉田：林先生、心温かいメッセージをありがとうございました。
今日は本当に長い時間ありがとうございました。

川田：ありがとうございました。

林：ありがとうございました。

ご寄付申込み方法：林先生へのご寄付に興味がある方は JAHA 事務局まで連絡をお願いします。
TEL：03-6262-5252　　メール：info@jaha.or.jp